

茨城県が舞台

連続テレビ小説

ひよっこ

平成29年4月3日(月)放送スタート
全156回(予定)

連続テレビ小説・第96作「ひよっこ」は、
東京オリンピックが開催された1964年から始まる物語。
茨城県北西部がドラマの舞台となります。



(後列 左から) 古谷一行、木村佳乃、有村架純、峯田和伸
(前列 左から) 宮原和、高橋来

作：岡田恵和(オリジナル作品) 音楽：宮川彬良



高度成長期の真っただ中、日本の発展を支えたのは、
地方から上京し懸命に働いた名もなき人々でした。

この物語のヒロインも、そんなひとり。

集団就職で上京した“金の卵”ヒロインが、
自らの殻を破って成長していく波乱万丈青春記です。



物語

1964年(昭和39年)秋。東京オリンピックが目前に迫っていたが、谷田部みね子(17)は今ひとつ実感が湧かない。みね子は、茨城県の北西部にある山あいの村・奥茨城村で育った。不作の年に作った借金を返すために、父は東京に出稼ぎに行っている。高校を卒業したら、農家の仕事を手伝って祖父と母に楽させてあげたい…。そう思っていたみね子の人生は、お正月に父が帰ってこなかったことで一変する。

「お父さんの分も働いて仕送ります。東京に行かせてください」

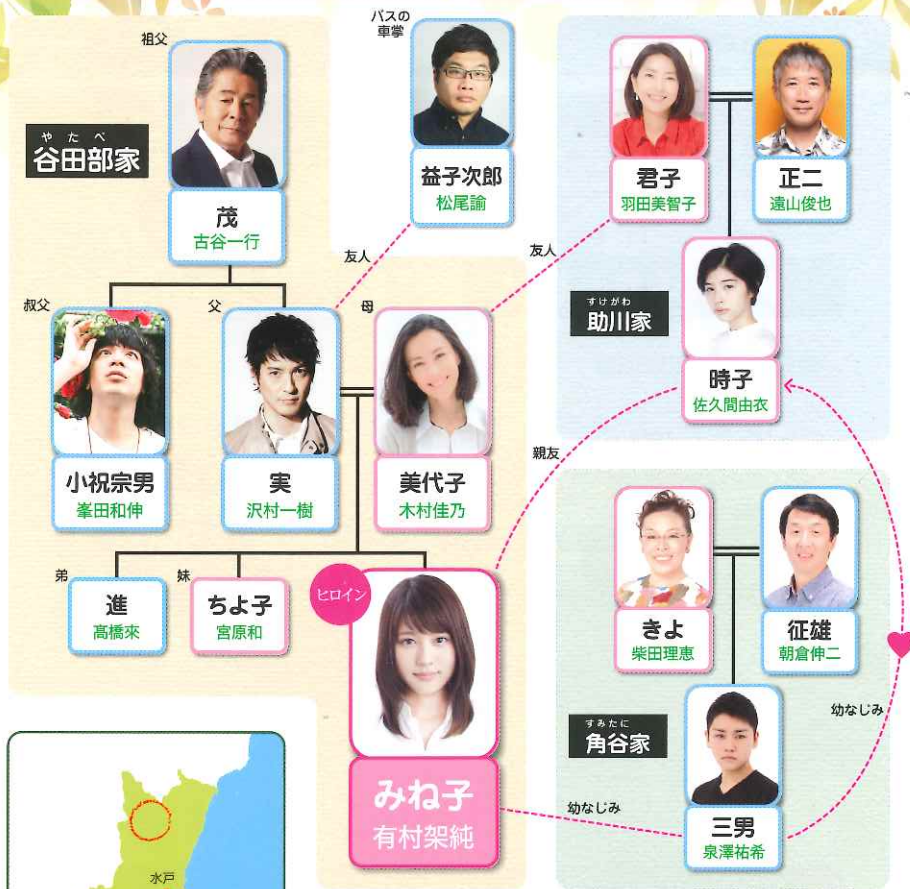
東京に行けば、いつかきっと父に会える気がしたのだ。2人の幼なじみと一緒に集団就職で上京したみね子は、下町の町工場で働き始める。“金の卵”を待ち受けていた厳しい現実の時々くじけそうになるが、東北各地から上京してきた寮の仲間たちや舎監さんが心の支えとなっていく。しかし、オリンピック後の不況のあおりを受けて会社は倒産。工場は閉鎖されてしまう。

行くあてのないみね子を拾ってくれたのは、かつて帰省した父から「美味しい」と土産話を聞かされていた洋食屋だった。店での給仕や出前、仕込みの手伝いがみね子の仕事になった。女将とその息子の料理長、そしてコックたち。皆、人使いは荒いが情にもろく、家族のような存在になっていく。みね子はさまざまな出会いと別れを経験しながら試練を乗り越え、見知らぬ町だった東京にしっかりと根を張っていく。

金の卵…地方からの若年労働者。60年代“金の卵”の主役は、
中卒から高卒になった。64年の流行語。



「ひよっこ」人物相関図 ～故郷編～



ドラマの舞台

ドラマの舞台となるのは、茨城県北西部。“奥茨城村”という架空の村です。茨城県の農業産出額は全国2位。県の北西部には、清流に育まれた豊かな田園や里山が広がります。茨城県が連続テレビ小説の主な舞台になるのは、第14作「鳩子の海」に次いで2回目です。



みね子は、奥茨城の暮らしが大好きな女の子です。

昨秋、茨城県内で
ロケが行われました

ヒロイン・谷田部みね子の
高校時代を中心に撮影しました。



みね子たち同級生が
毎日の通学で使うバス



叔父・宗男
愛用のバイク



谷田部家の
にわとり小屋



ロケには地元の方、のべ約350人にご参加いただきました。
稲刈りのシーンでは、機械化されていない昭和30年代の農業スタイルを再現。
出演者だけでなく、たくさんの地元の方々やスタッフ勢そろいで、1日で稲刈りを行いました。

